懸賞論文の選考について

懸賞論文は個人執筆論文と共同執筆論文部門に分けて審査し、それぞれの最優秀論文に賞状と副賞が授与される。個人執筆論文部門に４本、共同執筆論文部門に８本、計 12 本の応募があった。選考委員会の審査と教授会の議とを経て以下の論文に賞を与えることになった。

経済学部懸賞論文受賞者と論文名

＜個人執筆論文部門＞

井戸友貴（栗田匡相ゼミ）

海外直接投資による技術伝播と生活水準の向上

―マレーシアのゴム化学産業を例にして―

＜共同執筆論文部門＞

宮囿和希・木佐貫直毅・西田沙織・近藤憲吾（栗田匡相ゼミ）

ケニア農村における入植地と非入植地の比較とその考察

―ケニア共和国リフトバレー州での調査から―

＜講評＞

個人執筆論文部門の井戸論文は、マレーシアにおけるゴム化学産業のデータを用いて海外直接投資が技術伝播をもたらすのか、地場企業で働く人に対してどのような影響をもたらすのかを計量経済分析によって調査・研究したものである。分析の結果、マレーシアのゴム化学産業は極めて労働集約型産業であること、全要素生産性･輸出比率の両方の分野で一定の技術伝播がなされていることが認められるとしている。問題意識の明瞭さ、統計的分析手法の理解が高いこと、モデル適用の周到さなどにおいて特徴がある。学部学生としてふさわしい単独の優れた論文であるとして、高く評価された。

共同執筆論文は、現地調査によって得たデータを加工しながら、公式統計をも利用して、ケニア農村における入植地という土地所有の地域を分析し、入植地特有の労働形態、ひいては貧困の在り方を考察している。入植地は農業収入と反収で有意に高い値を出しつつも、所得では優位性が認められないとしている。問題意識、分析手法、実証結果の解釈も妥当性を得ており、グループ研究としてのメリットをもつ好論文であると評価された。以上が優秀論文についての講評である。

（懸賞論文選考委員会委員長　桑原秀史）